

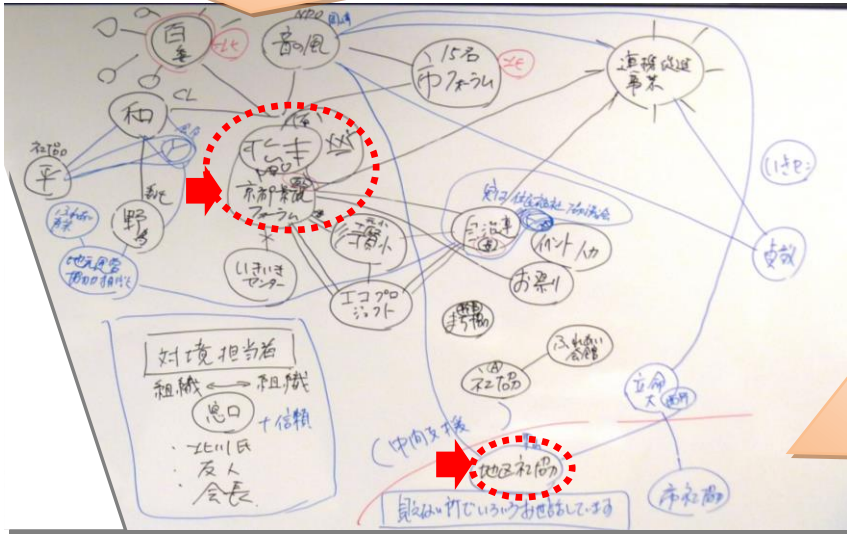
第3テーマ「地域コミュニティを支える各主体の連携強化」の検討状況

<松本委員の事例（NPO）から>

- 市民には、NPOの活動はもとより、名前すら浸透しているとは言えない。
- 寄付の募集などによりNPOの活動を進めるには、まず、地域に認めてもらえる努力（地域のゴミ拾い、花植えなど）を重ね、信頼を得ることが重要。
- 松本委員が未来まちづくり100人委員会など様々なところに顔を出して、対境担当者であるキーパーソンと信頼関係を築いている。

<吉原委員の事例（おやじの会）から>

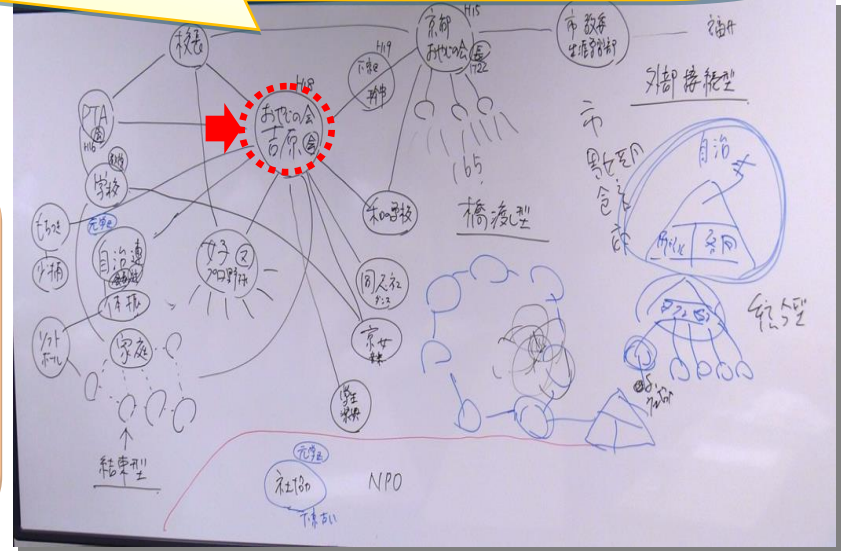
- おやじの会では、子どもを巻き込んだ地域密着型の活動を熱心に行っている。
- おやじの会の連携事例を類型化すると「結束型（各家庭のつながり）」「橋渡し型（おやじの会の事務局など）」「外部接続型（京都市教育委員会など）」の3つのパターンがある。
- 吉原委員はおやじの会以外の各種団体とも繋がりを持ち、連携を生んでいる。



各委員の活動状況を聞き取りました

<平田委員の事例（社会福祉協議会）から>

- 平田委員が社会福祉協議会の活動を通じて、多くのキーパーソンと繋がっている。
- 実は、見えないところで、社会福祉協議会が多くの事業を支援している。
- 学区自治連合会の組織体系は地域や行政区によって、いくつかに類型化できる。



それぞれの事例から見えてきたこと

- 組織と組織が連携するには、「対境担当者」という窓口となるキーパーソンが存在し、互いの信頼関係を築いて交流が始まる、といったケースが多い。連携の鍵となるこのキーパーソンは、様々な役回りを持っていることも多い。
- NPO、おやじの会、社会福祉協議会、学区自治連合会等の連携については、個別の事例を考察しても、様々な連携のパターンがある。連携といっても、一筋縄ではいかず、顔の見える対境担当者同士が人間関係を結んでいくことで組織の連携が広がっていることが分かる。
- 未来まちづくり100人委員会や地域とNPOとの連携促進事業など、京都市の事業が呼び水となって、対境担当を生み出したり、組織同士の繋がりが発生していることが分かる。
- 連携や協働を進めていくには、当事者である組織やNPO等の団体だけでなく、組織の中間支援を行う別の組織（infrastructure organization）や人の存在が重要な役割を果たしている。
- 連携・協働の手法は、地域によって様々な異なった形があり、地域特性を理解しないと実情が見えてこない。

次回の意見交換会で議論していただく内容

今後の取組で必要となること

（平成28年度以降の主な取組（案）に以下の視点を取り入れる）

- 多くの役回りを持つ「対境担当者」を生み出すきっかけづくり（施策づくり）と育成（個人的な信頼関係を組織間の信頼に繋げていく）
- 景観・まちづくりセンターやいきいき市民活動センターなど中間支援を担えるような組織（infrastructure organization）の活用を通じた連携・協働
- 地域や組織の形態に応じた連携・協働の仕方の検討